

## 館蔵品展「昔の道具とくらし」出品目録

〔会期:平成31年2月2日(土)～5月6日(月・振休)〕

当館では長く後世に高岡の歴史文化を伝えるために、日頃、郷土の歴史・民俗・伝統産業などに関わるさまざまな資料を収集しています。

収集したそれらの資料は調査・整理し、適切に保存・管理して、その成果を展示や教育普及（講演・講座など）、情報公開などに幅広く活用しています。

本展では、当館が収蔵する衣・食・住をはじめとした古い生活道具類「民具」に焦点をあて、それぞれの民具がもつ歴史や用途に加え、その時代を生き抜いた人々の暮らしぶりについて展示・紹介します。明治・大正・昭和・平成と時代が進むにつれ、私たちの生活様式も大きく変化してきました。そうした変化を、民具をとおして当時の生活を再発見していただく機会になればと考えております。

最後に、本展開催にあたり貴重な資料をご寄贈いただきました皆様、関係各位に厚く感謝申し上げます。

No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	備考	所蔵先 (寄贈者名)
1	菅笠		1	径52.0×高12.5	主に雨具や日よけに使われた。高岡市福岡地域では、古くから菅が栽培され、その菅で笠が生産されてきた。平成21年(2009)には「越中福岡の菅笠製作技術」として、国の無形民俗文化財に指定された	当館 (神保成伍氏)
2	カンカン帽	大正中～昭和初期	1	径20.6×高9.6	麦藁帽子。麦藁をプレスして、糊やニスなどで塗り固めているため、軽くて丈夫である	当館 (富田保夫氏)
3	写真「着物姿でカンカン帽を被る男性」(複写)	昭和初年頃	1	—	日本では男性の夏のフォーマルな帽子として広まった。叩くとカンカンと音がするからカンカン帽ともいわれる	【昭】
4	モジリ(巻袖)		1	身丈83.0×桁60.0	女性用の仕事上着。袖口が細いため、仕事やしやすく、重ね着もできる	当館 (吉田元太郎氏)
5	袖無し		1	身丈63.0×桁39.0	袖がない腰丈ほどの短い上着。農作業時や、少し寒い時に作業衣や着物の上に着た。「ドーゲン」ともよばれる	当館 (藤田よしえ氏)
6	もんぺ		1	丈80.0×腰回94.0	女性の農作業用の野良着。戦時中からの女性の日常着だった	当館 (国奥定治氏)
7	写真「盥と洗濯板で揉み洗い」(複写)	昭和30年代以前	1	—	盥に水を入れ洗濯物を浸けて、しゃがんで洗濯板を使って、石鹸をこすりつけながら揉み洗いを	【昭】
8	写真「庭に盥を出して水遊び」(複写)	昭和47年(1972)	1	—	盥の中で水遊びをする子ども	【昭】
9	盥		1	径60.0×高22.5	洗濯用の盥。夏は盥でスイカやビールを冷やすのにも使われた	当館
10	洗濯板		1	幅55.0×奥行55.0×厚1.6	洗濯盥に湯や水を入れて、洗濯板を立て掛け、衣類を板の凹凸の溝にこすり合わせて汚れを落とす。女性の大切な嫁入道具の一つでもあった	当館 (谷道俊雄氏)
11	洗張板		1	幅189.6×奥行40.6×厚1.7	着物などを洗濯する際には、着物をほどいて布の状態に戻して洗う。洗い終わった布は糊付けをし、濡れているうちに洗い張りの板に張りつけて乾かす	当館 (日尾清作氏)
12	写真「洗張板で布を乾かす」(複写)	昭和51年(1976)	1	—	シワにならないように乾かすことができる	【昭】
13	「着物の丸洗いの図」(複写)		1	—	着物を丸洗いする場合の手順を示したもの	【い】
14	竹皮草履		2	幅12.0×奥行22.5	一足。竹の皮を編んだ底の部分に鼻緒が付けられた草履。底が半分ほどの長さしかない「足半草履」もある	当館 (富田保夫氏)
15	草鞋		2	幅22.0×奥行13.0	一足。主に稲藁で編んだ、長時間の歩行に適した履物。足首に藁紐を巻き付けて固定する	当館

16	藁長靴		2	幅10.9×奥行25.0×高さ34.0	一足。雪の中で履く藁製の長靴。底が草鞋になっていて、取り外しできる。爪先部分が割れており、履いてから縄で縛るため、隙間から雪が入らないようになっている	当館
17	ゲートル		2	—	足の脛を保護するためのもの。ラシヤ（厚く密な毛織物）製の細い带状布を巻き付ける巻脚絆。軍隊でも使用された	当館 (本房繁治氏)
18	男物用下駄		2	幅10.7×奥行23.0×高さ10.0	一足。雨天や雪道の歩行に履いた。差歯は減ったら差し替えた	当館 (西田弘氏)
19	子供用下駄		2	幅8.2×奥行16.8×高さ8.8	一足。2本歯の子供用差歯下駄	当館 (本郷与一郎氏)
20	女物用雪下駄		2	幅9.6×奥行22.4×高さ11.1	一足。歯の部分に鋸が取り付けられ、雪の中でも滑らない工夫がされている	当館 (横山宏平氏)
21	箒		1	幅52.0×奥行45.0×高さ21.0	野菜を洗ったり、とぎあげた米の水をきる道具。食材などを干すのにも使う。高岡では「箒筥」ともよばれた	当館 (田中為雄氏)
22	写真「囲炉裏端の風景」(複写)		1	—	場所・氷見市内。食事時は囲炉裏のまわりにそれぞれ箱御膳を並べて食事をしたり、来客をもてなす接客の場にもなった	【氷】
23	写真「レンガ造りの竈で料理」(複写)	昭和32年(1957)	1	—	竈には羽釜が2つ、真ん中には鉄鍋がのっている。写真奥にはヤカンやブリキ製のバケツが置いてある	【台】
24	「囲炉裏の図」(複写)		1	—	自在鉤で吊るされた鉄瓶や囲炉裏端の様子が示された図	【イ】
25	写真「囲炉裏に置かれた竈にかけられた羽釜」(複写)	昭和34年(1959年)頃	1	—	手前には自在鉤に鉄瓶が下げられ、竈の焚口の前には火箸がある。写真奥の薪を燃やしている	【台】
26	鉄鍋		1	径32.4×高さ17.4	囲炉裏や竈に掛けて、汁物や煮物などを煮炊きした。大鍋では大量の里芋やさつま芋などを煮たという	当館
27	鉄製羽釜		1	径43.0×高さ33.0	ご飯を炊く釜。竈にかけるための鏝を羽根に例えて羽釜という	当館 (筏井晴夫氏)
28	アルミ製羽釜		1	径41.0×高さ33.5		
29	蒸籠		4	—	鍋や釜の上ののせて、もち米・団子・赤飯などを蒸す道具	当館 (金刺亀太郎氏)
30	陶製釜	昭和14～20年(1939～45)頃	1	径21.8×高さ15.0	戦時中の金属代用品。戦時中の「金属供出令」により、家の中にある金属製品を全て差出し、代わりに木や陶器の代用品を使うことを強制された。釜のほか、湯たんぼや枕などいろいろな代用品があった	当館 (五嶋孝一氏)
31	しゃもじ立て		1	径6.3×高さ59.7	しゃもじ立ては、竹の節を用いて筒を連ねたように作ったもの。台所の脇に掛けておいて、しゃもじ・はんがい・箸などを挿しておくのに使われた	当館 (徳田三郎氏)
32	ナショナル 電気炊飯器		1	径26.7×高さ26.5	ナショナル（現・パナソニック㈱）製の電気炊飯器。タイムスイッチ付きで、一升炊き。日本（世界）初の電気炊飯器は、昭和30年の東芝製	当館 (日尾清作氏)
33	保温ジャー「象印トップジャー」	昭和40年(1965)発売	1	幅29.0×高さ30.5	真空の二重ガラスに覆われた内部に、炊きあがったご飯を入れて保温するもの。電気がなくても保温・保冷できる「魔法瓶」の一つ	当館 (富田保夫氏)
34	写真「改善される台所」(複写)	昭和30年(1955)	1	—	場所・山形県酒田市。タイル張りの竈、新型の手押しポンプなどがある	【台】
35	飯盒	昭和15年(1940)	1	幅20.3×高さ14.5	炊飯器を兼ねた弁当箱。当初は軍隊で使われた。中蓋（掛子）はおかずを入れるもの。または中蓋1杯の米に外蓋1杯の水で丁度良い水加減となる	当館

36	写真「箱膳で食事をする家族」(複写)	昭和32年(1957)頃	1	—	各々が箱膳で食事をとる風景	【台】
37	箱膳		1	幅31.0×奥行31.0×高17.0	一人用のご膳。箱の中に茶碗・箸・皿などを入れておき、食事の時に蓋をあおむけて上に茶碗を並べてご飯を食べる。食事後は中へ食器をしまっておく	当館
38	写真「ちゃぶ台を囲む食卓の図」(複写)		1	—	数人が囲んで食事をする御膳。昭和戦前から普及し始めたが、多くの農家では戦後まで箱膳が使われていたという	【イ】
39	酒樽		1	径34.0×高20.9	酒を入れておいた道具。上げ底で漆が塗ってあるので、祝い事に使われたものと思われる	当館
40	片口		1	径25.0×高15.5	油や酒、醤油など液体のものを入れ、他へ移すのに使用。片側に注ぎ口をもつ。木製や陶磁器製のものもある	当館
41	通い徳利(通り町・富田醤油店)	明治末～昭和初期	1	幅14.5×高26.0	酒屋や醤油店が貸し出す徳利。客はこれを店に持っていき、必要なだけの量の酒や醤油を購入した。代金はつけ(後)払いで、お盆と年末にまとめて支払った。貸徳利、貧乏徳利ともよばれる	当館
42	電気コンロ	昭和中期	1	幅27.2×奥行19.7×高7.8	戦後、七輪や練炭火鉢とともに使われた。電熱器ともいう。東京芝浦電気株式会社(現・東芝)製	当館 (神保成伍氏)
43	アルマイト製弁当箱	昭和前期	2	—	これまでの竹の皮や柳行李に代わる弁当箱として、昭和初期頃より普及し始めた。アルミニウムの腐りやすく傷つきやすい点が改良された	当館 (邑本順亮氏)
44	めんば	昭和50年(1975)	1	幅29.5×奥行21.5×高10.5	エゾ松を材料に作られた曲物の弁当箱。「飯輪」から「めんば」とよばれるようになったという	当館
45	鯉節削り		1	幅27.2×奥行13.0×高9.7	鯉節を削る道具。引き出しのついた箱の上に鉋の刃が付いている。削った鯉節は下の引き出しに入る	当館 (篠井晴夫氏)
46	蒟蒻突き		1	幅40.0×奥行10.0×高5.9	筒の中に蒟蒻を入れて、突き棒で押し出すことにより、金属製の網目から蒟蒻が細長く切断されて出てくる仕組み	当館
47	写真「井戸から水を汲み上げる」(複写)	昭和32年(1957)頃	1	—	滑車に縄を通して、釣瓶桶で水を汲み上げる	【台】
48	釣瓶桶		2	—	縄や竹竿の先に取り付けて井戸の水を汲みあげる桶。滑車に吊るして使われる。杉板を並べて鉄の箍で押さえてある	当館 (石田喜平氏)
49	自在手燭		1	幅19.8×奥行10.1×高13.2	蠟燭を立てて持ち運ぶ移動用の燭台。垂直に立てて鴨居・長押などに引っ掛ける「掛燭」にもなる	当館
50	差込蠟燭立		1	幅7.8×奥行12.7×高37.6	板に釘がついており、柱などに突き刺して使う蠟燭立。「火之要心」とある	当館 (神保成伍氏)
51	有明行灯		1	幅26.0×奥行26.0×高35.0	部屋の照明道具。持ち運びができる。油の入った皿に、綿糸などで作った灯芯を入れて点火した。夜明けまで常夜灯として使用されたので、「有明行灯」と呼ばれた	当館 (斉藤尚司氏)
52	家提灯	昭和期	1	径44.6×高75.0	中に蠟燭を入れて明かりをとる道具。日の丸の紋が入っていることから、祭りや行事などに使われたものと思われる	当館 (米森米太郎氏)

53	強盗		1	径27.5×幅42.5	一方向を照らすための手持ち用の灯火具。「強盗提灯」の略。現在の懐中電灯に相当する。中に蠟燭を立てて使用する	当館
54	角灯		1	幅9.2×奥行9.2×高20.5	室内用照明器具。持ち歩くこともできる。家の中の移動や近所へ出かける時にも使用。電灯が普及したあとも、停電時や懐中電灯が普及するまで使われた	当館 (泉治夫氏)
55	カーバイドランプ	大正～昭和前期	1	径14.0×高28.3	カーバイド（炭化カルシウム）に水を加えると発生するアセチレンガスを燃料として使用するランプ。火力が強く、燃料の持ち運びにも便利であった	当館 (徳田三郎氏)
56	練炭コンロ	昭和後期	1	径23.4×高25.6	練炭を中に入れて使用する。風で消えることなく長時間燃えるため、野外での煮炊きや暖をとる際に用いる	当館
57	練炭		1	径12.0×高11.0	炭粉、石炭粉などに接着剤を練り混ぜて固めた固形燃料。円筒形で、よく燃えるようにするために、縦に数個の空気穴が開けられている	当館
58	写真「家の前で写る母と子」(複写)	昭和20年(1945)頃	1	—	自転車を持ち、もんぺ姿の母親と子どもが写る。背後には、軒下に木と竹で枠を組み、蕨状の藁で覆った雪囲いがある	【高】
59	火鉢		1	径44.6×高29.2	灰を入れて炭火をおこし、手足を温めたり、湯を沸かししたりする暖房具。石油ストーブが登場して以降、衰退していった	当館 (菊田明美氏)
60	陶製湯たんぼ		1	幅26.2×奥行14.2×高16.5	中にお湯を入れて、手足や体を温めるための道具。やけどしないように布に巻いて、布団の中に入れた	当館 (江洲安太郎氏)
61	ブリキ製湯たんぼ	大正～昭和初期	1	幅32.0×奥行24.0×高9.0	身体を温めるために湯を入れて寝床で使う道具。湯が冷めないように、注水口をできるだけ小さく作り、栓をして使う	当館 (織田睦夫氏)
62	コクヨヒーター (足温器)	昭和20年代	1	幅24.4×奥行18.7×高13.1	足を温める道具。木枠中に入っている電熱線に電気が通って発熱する仕組み	当館 (神保成伍氏)
63	写真「置炬燵の図」(複写)		1	—	炬燵槽とよばれる木枠の中心に、行火または掘り炬燵を置き、上から炬燵布団をかけて使われた	【イ】
64	炬燵槽		1	幅50.5×奥行50.5×高37.5	中に炭火を入れた行火などをおき、布団の中で足を温めた	当館 (金刺亀太郎氏)
65	ねごごたつ (行火)		1	幅・奥行・高各25.0	中に炭火を入れて手足を温める道具。これを覆うように槽をのせ、その上に布団をかぶせて暖をとった	当館 (江洲安太郎氏)
66	火のし		1	径11.7×長37.7×高5.4	中に炭火を入れて、その熱で布などのシワをのばすための道具	当館 (吉野作治氏)
67	ナショナル スーパーアイロン	昭和2年(1927)発売	1	幅17.5×奥行14.6×高11.9	松下電器製作所（現・パナソニック）が発売した電気アイロン。電気アイロンは、明治33年(1900)頃に登場し、各家庭に普及し始めたのは大正6年(1917)頃であるとされる	当館
68	蠅取り器		1	径17.8×高14.3	中に水などを入れ、容器の下に紙を敷いて飯粒や砂糖を置くと、下部から蠅が入り水に落ちる仕組み	当館
69	陶枕		1	幅21.2×奥行11.2×高10.4	陶磁製の枕。中が空洞になっていて小石が入れてあり、動くとカラカラ音がする。この枕をすると血圧が下がるなどといわれ、近年まで健康枕として使われてきた	当館 (米澤暢晃氏)

70	箱枕		2	—	寝る時に使った道具。江戸時代に鬘を崩さないよう首をのせていたが、明治期以降もしばらく使用された	当館 (泉治夫氏)
71	シンガー 足踏みミシン	[製造年] 昭和45年(1970)以降	1	幅117.0高100.0×奥行41.0	シンガー(1851年創業)はアメリカのミシンメーカー。足元のペダルを踏むとベルトやハンドルが回り、針が動く。使わないときは、ミシン本体を台の天板の中に入ることができる	当館(高岡市立中央公民館)
72	写真「嫁入り道中」(複写)		1	—	場所・埼玉県所沢市。角隠しを被る花嫁の姿	【い】
73	角隠し		2	幅16.5×長112.0	婚礼の際に、花嫁が結った高島田の鬘を飾る布	当館 (神保成伍氏)
74	写真「昔の嫁入り」(複写)		1	—	笠と杖を持ち、脚絆に足袋、草鞋姿の人により、嫁ぎ先へ持参するたんす・長持などの嫁入道具が運ばれた	高岡市
75	写真「射水神社の結婚式」(複写)	昭和42年(1967)	1	—	写真左奥には、花婿・花嫁と仲人夫妻がみえる。高岡古城公園本丸にある射水神社では、現在でも多くの結婚式、披露宴が行われている	【高】
76	水合わせの竹筒		1	径6.2×高23.4	婚礼の「水合わせの儀」に使われた。竹筒の中に実家(育った家)の水を入れ、嫁ぎ先の玄関まで持って行き、その水を土製の盃(カワラケ)に入れ、それを娘が飲み干し、玄関先で盃を割る	当館 (金戸嵩氏)
77	重台・重布団・重箱		3	—	婚礼の後、近所や親戚への挨拶回りに行くときに使われる。赤飯や餅、饅頭などを重箱に入れ、その上から豪華な刺繍や家紋の入った重掛けを掛ける	当館 (江湊安太郎氏)
78	重掛け		1	73.4×70.2		当館 (手崎純子氏)
79	祝い熨斗		2	—	祝い事に使われた熨斗	当館 (木津鉄太郎氏)
80	友禅染幔幕に桜文花嫁暖簾		1	185.0×128.5	婚礼に際して花嫁が持参し、嫁入りの日に広間や部屋の入口に掛けた暖簾。三巾・四巾などのものがある	当館
81	表打蒔絵高下駄(女物)	昭和前期	2	幅22.5×奥行9.2×高11.2	一足。桐の台にカシ・ホオ・ブナ材の歯を差し込んだ差歯の高い下駄で、主として雨天の歩行時に爪革をつけて履く。竹皮や籐表つきの高下駄は、足袋を履いて余所行に用いた	当館 (手崎純子氏)
82	写真「つぶらに入る子ども」(複写)		1	—	場所・氷見市内。昭和20年代頃まで使われたという	【氷】
83	つぶら(嬰兒籠)		1	径69.5×高36.6	赤子の中に入れて、その周りに古着や毛布などを入れ、固定することができる。子どもが少し大きくなり動けるようになると、帯を掛けて抜け出せないようにもした	当館
84	写真「百日の祝い」(複写)	昭和39年(1964)	1	—	「一つ身」(乳児用の着物)を着た赤ちゃんの「百日の祝い」の様子。子どもの生後100日行われる儀式で、一汁三菜の「祝い膳」が用意される。「お食い初め」ともいわれる	【高】
85	写真「天神様の前で」(複写)	昭和42年(1967)	1	—	高岡では、昔から長男が生まれると母親の実家から天神画像が贈られ、毎年12月25日～1月25日まで飾られる。子どもの無病息災・学業上達を祈る	【高】
86	ホーロー看板「ヤンマーオフセット式石油発動機販売所」	昭和中期	1	36.4×54.4	ホーロー看板は主に屋外用の表示として、珐瑯仕上げで制作された鉄製看板。ヤンマーオフセット式石油発動機は、大正14年(1925)に製造・販売が開始され、昭和12年(1937)に製造が中止された	当館 (中山武央氏)
87	鋤簾		1	幅27.5×奥行37.8	土砂などを掻き寄せる道具。田起こしや穴掘り、アサリやシジミなどの貝類を採集するための掻き出しなど、様々な使い方をした	当館(中田地域生涯学習推進協議会)

88	株切り	昭和10～20年代(1935～55)	2	—	春先の田起こしに先立ち、前年の稲株を切り割る鎌のこと。当初は長い柄の付いた「株かけ鎌」が使われたが、後に両足に履く「株切り」に変化した	当館 (中山武央氏)
89	背板		1	幅47.0×奥行77.0	荷物を担ぐために背負う運搬道具。稲や薪など、量の多い物を運ぶのに便利	当館 (堺喜十郎氏)
90	荷棒 (背板用)		1	長71.5	疲れたときなど、荷物を背負ったまま荷棒を背板の下において支えて休息することができる	
91	写真「背板で麦束を運ぶ」(複写)	昭和59年(1984)	1	—	場所・埼玉県横瀬町	【い】
92	写真「背板で荷物を運ぶ」(複写)		1	—	場所・氷見市内。「ショイコ」ともよばれる	【氷】
93	写真絵葉書「背板で馬肥を運ぶ女性たち」(複写)	昭和8～19年(1933～44)頃発行	1	—	馬屋肥とは、家畜の糞尿や敷き藁などを腐らせて作る肥料のこと。庄川(富山県西部)の近辺の農村にて	当館
94	藤箕		1	幅58.0×奥行50.5×高12.0	穀物を選別したり、運搬したりするための農具。板製や竹製などがある	当館
95	写真「箕による籾の選別」(複写)		1	—	両手で縁を持ってあおり、風によって籾を選別する。稲扱き、籾摺り、精米などの秋の収穫作業全般に広く使われた。また、堆肥や肥料を田んぼに撒くなど、様々な用途に使用された	【写】
96	写真「馬鋤による代かき作業」(複写)		1	—	馬に続き、男性が馬鋤を持って作業している様子	【氷】
97	馬鋤		1	幅90.3×奥行8.0×高70.0	馬や牛に曳かせて代かき(田植えのため、田に水を入れて土を砕いて掻きならす作業)をする道具	当館 (中山武央氏)
98	「牛に馬鋤を曳かせる図」(複写)		1	—	一人が馬に繋がれた馬鋤を支え、もう一人が馬の綱を曳く図	【い】
99	写真「排水溝掘機(ミゾカキ)で排水の溝切り作業」(複写)		1	—	場所・高岡市下麻生	【中】
100	排水溝掘機(ミゾカキ)		1	幅20.8×高78.5	水田を干すために、排水溝を掘る道具。また畑の溝掘りにも利用した	当館 (中山武央氏)
101	写真「ダブル犁での牛耕」(複写)		1	—	ダブル犁は犁先とヘラが同時に左右に回転し、土を耕すことのできる道具。明治末頃から普及し始めた	【写】
102	ダブル犁	明治末～昭和前期	1	幅165.0×奥行55.0×高122.0	牛や馬などに括り付けて土を耕す道具。鉄製のヘラが左右に回転することにより、土を耕す作業が楽になった。ダブル犁は明治33年(1900)に考案された。土を片側にしか耕せない「単用犁」を改良したもの	当館
103	写真「柄振りによる田ならし作業」(複写)	昭和46年(1971)	1	—	場所・埼玉県所沢市	【い】
104	柄振り		1	幅104.0×奥行10.0×高167.0	田植え前の整地作業で最後の代かきをした後、さらに土を柔らかくしたり、平らに均すのに使われる道具	当館 (中井七郎氏)
105	田下駄		2	幅15.0×奥行15.0×高5.0	一足。深田や泥田に入って作業をする際に、体が沈むのを防ぐために足に履くもの。水下駄ともいう	当館 (中山武央氏)
106	写真「回転式中耕除草機での中耕と草取り作業」(複写)		1	—	場所・埼玉県小川町。「ラチウチキ」とも呼ばれる	【い】
107	回転式中耕除草機		1	幅46.5×奥行23.0×高146.0	二条取り。田植えの後に稲の間を転がして、中耕(稲の根に酸素を補給すること)と草取り作業を同時に行う農具。大正年間から昭和45年(1970)頃まで使われていた	当館 (中井七郎氏)

108	写真「田植え作業風景」 (複写)		2	—	女性が列をなして田植えを行う作業風景	【中】
109	写真「鎌による稲刈り」 (複写)		1	—	皆で協力しながら、稲を一束一束刈り取る作業風景	【写】
110	田股引		1	丈74.0×腰 回94.0	水田作業で着る丈の短い股引	当館 (吉田元太郎氏)
111	写真「千歯扱きによる脱穀作業」 (複写)	昭和30年代頃	1	—	場所・氷見市内	【氷】
112	千歯扱	江戸期～昭和10年(1935)頃	1	幅51.3×奥行26.8	稲や麦の穂を脱穀する際に使われる道具。昭和10年頃まで使用され、後の回転式足踏脱穀機へと移行した	当館(中田地域生涯学習推進協議会)
113	手動稲刈機	昭和36～37年(1961～62)頃	1	全長155.5×幅114.0×奥行25.0	手押しの稲刈り機。のこぎり目の付いたY字型の部分で稲株を挟んで安定させ、その上にハンドルから繋がった鎌と支えが両方から交差して切る	当館 (柴田慎也氏)
114	唐棹		1	長175.4×幅21.4	上部の打ち棒を回転させてレンゲを叩き、中から種を取るための道具。稲・麦・粟・稗・豆類の脱穀などにも使われた	当館 (中山武央氏)
115	写真「唐棹作業の図」 (複写)		1	—	「ポータ叩き」ともよばれる	【中】
116	回転式足踏脱穀機		1	幅72.0×奥行74.0×高63.0	踏み板を足で踏んで胴を回転させ、胴に打ってある針金が稲の穂から籾粒を弾いて落とす農具。昭和30年代には動力脱穀機の普及によって使われなくなった	当館
117	写真「回転式脱穀機による脱穀」 (複写)	昭和30年代	1	—		【高】
118	踏車		1	幅158.0×奥行37.0×高93.5	羽の部分に人が乗って踏むことにより、水位の低い堀から高い田へ水を上げることができる道具	当館 (中井七郎氏)
119	写真「踏車で田に水を入れる」 (複写)	大正期	1	—	場所・高岡古城公園池の端掘	高岡市
120	写真「千石通しで玄米の選別」 (複写)		1	—	土臼で籾摺りをした後の米と籾を選り分ける道具。「千石通し」や「万石」ともよばれる	【写】
121	写真「田植枠(コロガシ)で筋目付け作業」 (複写)		1	—	コロガシで田植え作業の効率がぐんと上がった	【中】
122	田植え枠(コロガシ)		1	幅35.0×奥行35.0×高233.5	整地して水を張った田んぼで、枠を転がして四角の筋目をつけ、その交点に苗を植えていく。枠の部分が、鉄や塩ビ管でできたものもある	当館 (中井七郎氏)
123	唐箕		1	幅110.0×奥行56.4×高107.5	大豆用の唐箕。羽根板を回して生じる風により、下の口から大豆が出て、横の口から塵やくずなどが出る。製造元は高岡市百姓町(千石町)の宇於崎農機製作所	当館(山元醸造(株)・山本衛氏)
124	写真「唐箕による選別作業の図」 (複写)		1	—	手前にある両方の口から、穀物が選り分けられて出てくる様子がわかる	【中】
125	写真「唐箕による籾の選別」 (複写)		1	—	ハンドルの付いた羽根板を回して生じた風を利用して、籾殻を選別する大型農具。脱穀した籾の選別や籾摺り後の玄米と籾殻、屑米のほか、大豆や麦などの選別にも使われた	【写】
126	写真「馬を用いた田起こし作業」 (複写)		1	—	馬に続いて男性が犁を持って作業している	【い】
127	写真「苗取り作業」 (複写)		1	—	苗を取り束ねて、田植えの準備をする	【中】

128	写真「田舟を使った稲刈り作業」(複写)	昭和42年(1967)	1	—	場所・埼玉県所沢市。田舟は主に湿田の稲刈り時に、刈り取った稲を湿田から畦や農道まで運ぶ道具。肥料や土を運ぶのにも使用した	【い】
129	写真「稲干し作業」(複写)		1	—	刈り取られた田んぼの上で、規則正しく稲が干される作業風景	【中】
130	写真「土臼での粃摺り」(複写)	昭和期	1	—	粃摺り用の土臼は、土に櫟や檜の木の歯を埋め込んだ上臼と下臼からなり、上臼の回転部分に取り付けられたヤングリ(遣り木)を、押したり引いたりして回して米と粃殻を分ける大型農具。高岡市内	高岡市
131	写真「いもの苗床づくり」(複写)		1	—	場所・高岡市島新	【中】
132	写真「南砺の干し柿作業風景」(複写)		1	—	冬季の副業として行った農家もあったという	【中】
133	写真「横田村共同倉庫開庫」(複写)	明治44年(1911)	1	—	高岡市と合併する以前の横田村の農業倉庫。村内算出米の品質向上を目指して、産米組合と農業倉庫が設立された	【高】
134	写真「国分浜の天草干し」(複写)	昭和10年(1935)頃	1	—	天草は国分浜沖の男島付近の海中から採る。戦前は男性が潜って採取し、女性が砂浜に広げ打ち水をし、日光にさらした	高岡市
135	写真「羽広の苺狩り」(複写)	大正初期	1	—	かつてあった広大な苺農園「羽広田園」で苺狩りをする人々。男性は背広にカンカン帽を被り、女性らは着物姿で楽しげな様子が伝わってくる	高岡市
136	写真「水堀に生い茂る蓮と駐春橋」(複写)	大正期	1	—	高岡古城公園の水堀では、蓮が多く自生し、蓮根のほか蓴菜や菱の実も収穫できた。駐春橋は二の丸から園外に架かる橋	高岡市

※所蔵先の写真の出典は、【氷】『氷見市史』(氷見市役所, 1963年)、【中】『中田町誌』(中田町誌編纂委員会, 1968年)、【写】『写真でみる農具・民具』(農林統計協会, 1988年)、【台】『台所用具の近代史』(有斐閣, 1997年)、【イ】『イラストで見るモノのうつりかわり 日本の生活道具百科』(河出書房新社, 1998年)、【昭】『昭和のくらし博物館』(河出書房新社, 2000年)、【い】『いまに伝える農家のモノ・人の生活館』(柏書房, 2004年)、【高】『保存版ふるさと高岡』(郷土出版社, 2009年)を示します。

※資料保存のため、一部展示替えをすることがあります。写真・図・複数資料の寸法は割愛しました。

**計 136件157点**